影

静かに呟くＣＰＵの
我々の脳神経に対する挑戦

溶解する
と　け　る

ひとつの死骸に群がる小鳥がひれ伏す
食物連鎖を侮蔑する者の出現

我々は手渡し始めている
委ね初めている

我々が世界を奴隷としたように
我々も奴隷となる

目に見えぬ欺瞞が蓄積され
既知のものとして認知されてゆく

影だ
被写体の無い影

一個人としての苦悩は無視される
そう指示することができる

この掌に　そしてこの指先に
可能な技とは何か

機能的懐疑という哲学が蹂躙する
確率というだけの個性、人間性

ＣＰＵがはじき出す予測＝確実な未来
それに備えなければならぬ―――と

その未来の奴隷となった我々は
それを活用と呼んでいる

受容するのみの脳神経が

その原初的記憶との相克に身を捩る

プラットホームの端に佇む者が居る
彼の死の理由とは―――

ＣＰＵの挑戦が静かに牙をむきはじめている
神になるための挑戦がはじまっている

(2006.2.1)